2022年度事業報告について

令和４年　１月　１日から令和４年 12 月 31 日まで

特定非営利活動法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト

１．　概況

コロナ感染の影響が長引く中、少しずつ活発な交流の場面が増え、新しい事業もスタートした。公的な助成が減って経済的には厳しい１年であったが、会員さんによる寄付や、日常的な農園管理への協力のおかげで、苦境を乗り越えることができた。

会員数の増加に伴って事務量が膨大になっていること、団体に対する期待が多様化してきたことを考慮し、アンケートを実施して会員の参加意向を調査した。その上で、基盤となる会員制度や収益事業のあり方について、外部専門家を交えた丁寧な見直しを行った。

目標のひとつであった環境負荷の削減については、学習や情報発信に努めたものの、エネルギー消費実態の検証・検討はできなかった。一方、教育旅行や大学ゼミなどの教育研修プログラムは質・量ともに向上し、収益事業の柱として期待が高まっている。

さらに、地域ぐるみの SDGｓ研修プログラムやボランティアによる農作業補助を通じて、町の観光や農業、地元学の勉強会などで貢献し、地域における信頼が高まった。

２．　余市エコカレッジ（主催事業）

環境やコミュニティなどのテーマごとにゲストスピーカーを招き、連続オンライン・エコカレッジを開催した。参加費無料で学生や遠方の人も参加しやすく、計 11 回、のべ 361 人の申し込みがあった。講座をきっかけに会員になったり、現地に来訪する人も現れ、PR 効果も大きかった。

１月 19 日　持続可能な食と農　（小野邦彦/㈱坂の途中）29 人
２月 16 日　幸せの経済学（辻信一/ナマケモノ倶楽部）64 人
４月 20 日　余市エコビレッジ説明会＆ワインで乾杯（小西史明、村田均）21 人
６月 15 日　パーマカルチャーとエコ建築（山田貴宏/ビオフォルム環境デザイン室）60 人
７月　６日　種を取り巻く問題とその行方（久田徳二/北海道たねの会）35 人
７月２０日　コミュニティのつくり方（吉武大輔/俵山ビレッジ）30 人
８月１７日　コンポストで循環生活（たいら由以子/ローカルフードサイクリング㈱）29 人
９月２１日　外国人労働者問題から異文化共生社会を考える（宮入隆/北海学園大学教授）14 人
１０月１９日　海の環境を守る（圓谷昂史/北海道博物館）23 人
１１月１７日　ホルケホイスコーレの留学体験とデンマークの暮らし
（秋保沙央里/北海道エコビレッジ推進プロジェクト）　56 人
１２月２１日　人権と平和（関根健次/ユナイテッドピープル㈱）23 人

ワークキャンプは 2 回開催した。春はブドウ畑の開墾に道内外の大学生が参加し、夏は 3 年

ぶりに英国カーディフ大学の学生２人が加わって、タイニーハウスの塗装や近隣農家の手伝いなどで貢献してくれた。

また、会員によるクラブ活動を奨励したところ、新規に畑クラブ、鶏クラブが立ち上がり、活発な自主活動が行われたのも成果だった。

３．　余市エコカレッジ/体験・研修プログラム（受託事業）

外部グループごとの課題や要望に併せた研修の企画・コーディネートを行った。有意義な交流や学び合いの機会となり、参加者も受入れ側も満足度が高かった。

ESD キャンパスアジア（北海道大学）、ビオフォルム環境デザイン室（PCCJ）、ひがしかわ観光協会（東川町）、九重グリーンツーリズム研究会（大分県）、ゼロカーボン北海道研究会（北海道中小企業同友会）、環境省北海道中間ブロック会議、スローフード北海道、北海道大学ワンダーフォーゲル実習、慶応大学山形ゼミ、北星学園大学寺林ゼミ、シュタイナースクールいずみの学校、宝島旅行社インバウンド旅行　他

教育旅行を対象にした SDGｓ研修については、地域の一次産業や森林問題などをテーマに、生徒の意識や行動の変容をねらいとしたプログラムを実施した。
（5 月横須賀高校、7 月開明高校、10 月小田原高校　計 385 人）

修学旅行は規模が大きいので、準備も当日の運営も相当の負担を伴い、さらに対象が絞り切れないという難しさがある。しかしながら、町内の事業者と共に受入れすることで地域活性の一環になりうる、また学校教育と連携することで、幅広い若者に体験の機会を提供できる点を積極的に捉えて取り組んだ。
実践と並行して環境省の事業を活用しながら（観光地域づくり協議会主体）、体験メニューや教材の開発、学校や旅行代理店向けの資料作成、ファシリテーター講座などを行った。

その他、1 月に地域勉強会として「緋の衣を食べ継ぐプロジェクト」、2 月に教育フォーラム（北海道主催）で SDGｓ教育旅行の紹介、3 月にはカフェスロー（東京国分寺）でエコビレッジの活動とワインづくりを PR した。

４　教育ファーム

エコビレッジの自給的な暮らしの実践と多様な参加者が「自ら食べ物を作る」体験を得るために野菜やハーブ類を育てた。主な作業は畑クラブのメンバーと住込みボランティアが担い、今年度はビニルマルチから草マルチに変えるなど、環境負荷を減らすことに力を入れた。

ワインぶどうの栽培と醸造は、登醸造とじきの畑の指導・協力のもとに、作業はヴィンヤードクラブを中心に行った。ブドウ畑は有機 JAS の認証を取得した。

特筆すべきは、ユナイテッドピープル㈱と協働してスタートした余市ピースワイン・プロジェ

クトである。未利用農地を整地し、5 品種 270 株のブドウ苗を新植してヴィンヤードを拡大した。平和と多様性をテーマにした新しいワインづくりを目指し、大学のボランティア実習やワークキャンプなどを含め、多国籍（16 か国）の人びとが参加した。

自給用の鶏については、鶏クラブのメンバーが交代で飼育管理を行った。会員が各家庭の台所ゴミを餌として循環させたり、屠畜に挑戦したりするよい機会になった。

サクランボなどバラ科の果樹は、病害や雪害で枯死するものも出てきたので伐根した。学校プログラムを念頭に、積極的に活用できる森づくりを（フォレストガーデン）目指し、果樹の隙間にハルニレやヘーゼルナッツを植栽した。

5　地域貢献活動

近隣農家の繁忙期に会員やボランティアが手伝いにいったり、役場や観光協会の行っているボランティアマッチング事業に協力したりした。また、観光地域づくり協議会とともに、地域循環に資するツーリズムの意見交換会や地域資源を掘り下げる勉強会を開催した。その他、La fete やよいちスタイル祭りなどに参加したり、モンガク森林愛護組合と協働して、敷地内の森林の手入れを行った。

6　運営体制

会計事務、教育プログラムやピースワインプロジェクトはスタッフ（業務委託）が、日々の農作業や施設管理などは短期中期のインターン（無償ボランティア）が担った。

経理や庶務などの法人の基本的な情報整理ができたことは大きな前進であった。会員情報のシステム化については検討の途中である。

7　広報事業

HEPP の活動趣旨を広く発信し、会員拡大や収益につなげるために、ターゲットごとの分析や全体的な広報戦略を検討した。学生ボランティアによる特設ページ（Note）ができたり、インスタグラムを再開したりしたものの、広報担当者が不在な中で、十分な広報活動ができなかった。

HP のリニューアルについては、全体の見直し方針は定まったが、具体作業は一部訂正に留まった。